

## 『嵯峨行程』余滴（承前）

——嵯峨野あたり——

成田 俊治

延宝八（一六八〇）年九月十二日に白雲村の居宅を出た黒川道祐は、正親町通を西に北野天満宮・平野社大將軍・妙心寺・仁和寺をはじめ主な社寺・名所旧蹟陵墓、その他、伝説などを紹介し、その日のうちに北嵯峨の一部をまわり、翌日は「十三日ノ朝 齋了テ各々誘ヒ先ツ二尊院ニ到ル……」とて二尊院からはじめ天竜寺・臨川寺・法輪寺・証菩提院などをたずねた。そして、この日の夕べ

「暫ク河辺ニ徘徊ス 無レ程月出ニ東山ニ殊ニ清明ナリ 各歩レ月又帰ニ了壽坊」折節今夜俗称ニ豆名月ニ院主煮ニ莢豆ニ而賞レ之 今夜十三夜ノ月中華不レ聞レ玩レ之 本朝賞シ来ル事久シ 前ニ有ニ菅神之製作ニ後ニ有ニ法性寺忠通公之律詩」 特小倉山之名月又逢

事難レ期 深夜不レ寝眺レ之

と十三夜の月に明かしたという。十四日は下嵯峨・上桂・梅津・西院とまわり、大宮通より「堀川ヲ東ヘ西洞院裏辻ノ町ヨリ東ヘ 烏丸通ヲ北ヘ 乗レ月帰ニ白雲村」っている。

古典に通じ地理にくわしく、古記録・古文書を重視した彼は、社寺・名所旧蹟を資料を以て紹介し、口碑伝説・俗諺などもあわせ記しているが、「凡ソ俗伝ニ牽強附会ノ説多シ 不レ違ニ枚挙ニ」といひ「星移物換、陵谷変遷ノミニアラス 人間ノ宅地モ或ハ為レ貴為レ賤不レ堪ニ嘆息……」と自然・事物の幾星霜をへての変遷とともに、人の盛衰・居宅の興廢に感慨をしめしている。

さて、道祐の『嵯峨行程』を手引きに宇多野・鳴滝あたりを散策した（前号）私は、さらに嵯峨野に足をのばした。

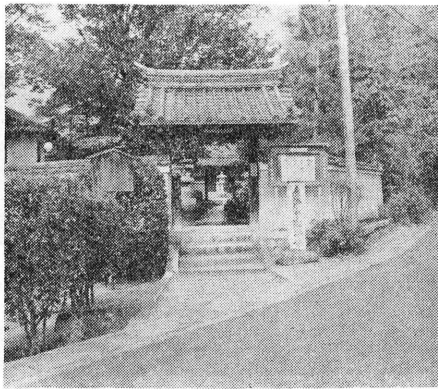
仁和寺の門前を西へ、宇多野の五又路をこえたと鳴滝から山越へと続く。鳴滝をすぎ起伏のある路をのぼりつめ、ゆるやかに下っていくと右手に窪地がある。ここは数年前まで樹木にかこまれた池があった。この池は「帯取池」とよばれ、昔から主がおり底ふかく、池の主が帯に化けて人を取るとの伝説が伝えられてい

る。『名所都鳥』によれば「鳴滝の西、千代旧道の東北に有 中古此池に大きな亀あり、人をたぶらかして帯を池の面にうかが 見るものこれを取らんとする時 手をもつて引こみうまくたべける。しかもその帯と見えしはうきくさ也」とあり、往きかう人を恐れさせたという。今では埋め立てられまわりの樹木も伐採され、昔をとどめる何ものもない。

さらに路を西にとって歩くと山越えにいたり、昔の千代の古道、右に旧御室御所茶所という石柱のたつ印空寺、左に桜の植木畑をみながら広沢池に出る。このあたりから大覚寺・清涼寺・二尊院にわたる小倉山までの一帯を嵯峨野とよばれ、古くより風雅の地として嵯峨天皇をはじめ貴紳の間で愛され、皇族・貴族が多く、の山荘や別業を営み、また文人墨客も遊んだ。そして江戸時代には、嵯峨野の春草、亀峰（天竜寺背景の亀山）の緑樹、広沢の秋月、小倉の紅楓、野宮の松風、岩嶺の積雪、洪川（桂川）の水鳥、清涼の晚鐘を「洛西嵯峨八景」とし（『京羽二重』）、また「嵯峨十景」（『都名所図会』）もえらばれ、景勝の地として親しまれた。

広沢池は周囲約一キロに及ぶ大きな池で、古来から嵯峨三沢池の一つであった。伝説によると、仁和寺の宇多法皇の孫にあたる寛朝僧正が永祚元（九八九）年

朝原山の麓に遍照寺を建立したが、その建立に際して開削されたのがこの池であり、遍照寺池ともいわれる。また一説には八世紀頃秦氏が低湿地帯であったこの地を開拓したとき造られたともいわれる。平安期には池のほとりに月見堂・釣殿・潜龍亭などがあり、観月の名所として多くの貴族が訪れもてはやされた。寛朝によって建てられた遍照寺は、真言広沢流の中心寺として栄え、大きな伽藍を誇っていたというが、鎌倉時代に入って衰微するにいたり、応仁の乱についに荒廃したという。道祐によれば、池の北に古の遍照寺の跡という礎盤・古井が残り、寛朝登天の松もこの辺りにあ



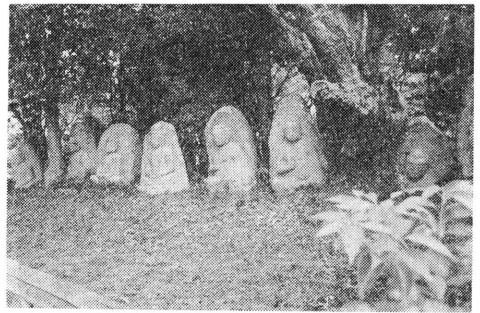
遍 照 寺

という。いま広沢池の南二百米ほど行ったところにある遍照寺は、寛永十（一六三三）年に再興されたもので、往時の寺觀をしのぶべくもない。しかし本尊不動明王と十一面觀音像は創建時の古仏とされ、重文に指定されている。

池の西南に小さな祠がある。児の社という。伝説によれば長徳四（九九八）年に亡くなった寛朝は、池の北方の山にある松の梢から登天したが、彼の侍童の一人が寛朝の死を嘆き悲しみ、遍照寺釣殿から池へ身を投げて死んだ。死後侍童は里人の夢にあらわれ、我は文殊の化身である、われをまつれと告げて消えた。そこで里人は祠をつくり毎年九月十三日にこれを祀ったという。

児の社の裏を右に折れ田園の中を大沢池に向う。北に朝原山の低い山なみをみ、その麓の竹藪の間に萱葺きの民家がみえかくれる風情は、嵯峨野のさびた美しさを表象している。

嵯峨院の苑池であった大沢池は、我国最古の庭園の一つといわれ、かつては天皇・貴族が龍頭鶴首の舟を浮かべて御遊されたことであろう。周囲の堤上には桜・もみじが多く花の名所として、また秋の観月に杖を引く人も多い。池の北畔に二十体近い石仏がならんでいる。そのうち大きい七体の石仏は鎌倉中期の造立とい



大沢池石仏群

われ、磨滅風化は進んでいるが、その厚肉彫の重量感ある風貌は、嵯峨野の風土にふさわしく、七百年余の盛衰を語りかけている。

大沢池から大覚寺の前を北に向うと浄土宗捨世派の祖称念上人を開山とする称念寺がある。称念上人は永正十（一五一三）年武藏国に生れ、増上寺、下総飯沼弘経寺で浄土宗学を研鑽したが、彼は出世栄達を好まず、戒儀を守り閑静な地に道場をもうけ念仏修行に専念し、もって宗祖法然上人の恩に報いんとしたのである。生涯を通じて寺を創建すること四十七寺に及んだ

といわれる。この称念寺もその一であり、特に山城国の称念上人開基地七ヶ寺の随一とされていた。当寺創建について、元禄九（一六九六）年に時の住持仰誉が本寺である一心院に報告した『開山・由緒・来歴書』によれば、

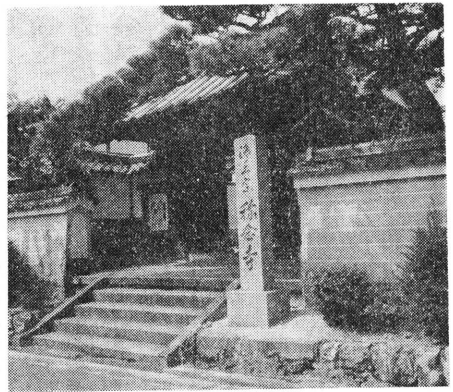
### 「一、寺起立之事

大覚寺御門跡称念寺殿准三宮 義俊公退去之地也  
然称念上人城北鞍馬山之麓野中村専称庵閑居之時  
義俊公数有入請 終被成招請 天文十九年<sup>庚戌</sup>歲改  
建殿宇 永為淨土宗門 御譲与被成候 今年迄百四  
拾七年 其後於東山一心院還化

一、当院者称念上人之開基地 七ヶ寺之随一<sup>ニ</sup>而候」  
とあり、大覚寺三十四代門跡義俊准后が称念上人に帰依し、天文十九（一五五〇）年に寺を寄進されたことを濫觴としている。そして『山城名勝志』には

「称念寺 在<sup>ニ</sup>大覚寺乾山腹<sup>ニ</sup> 以<sup>ニ</sup>称念上人<sup>一</sup>為<sup>ニ</sup>開祖<sup>一</sup>古文書云称念寺准二宮義俊建立之勝区也 寺記云縁蒼上人諱吟翁後改<sup>ニ</sup>称念<sup>一</sup>天文二十三年七月十九日寂」

とあり、もと大覚寺の北西の山腹にあったという。昭和十年までは『山城名勝志』にしめすあたりにあったが、この年現在地に移転している。寺には開山称念上人の木像、義俊公の尊牌を安置している。

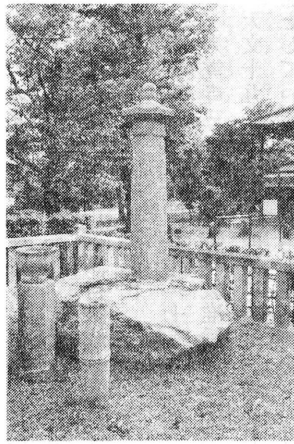


称 念 寺

この寺が称念上人の教化、義俊公との関係において成立したことはみた通りであるが、その後、もと大覚寺の寺侍の家で嵯峨第一の旧家といわれる野路井家をはじめ、下級武士などの家柄の家々を檀家とし、もと大覚寺の墓所であった北嵯峨の墓地をもつに至ったことは、地下の寺として機能をはたすようになったことを示すものであり、また三昧堂的な要素も見逃すことはできない。夏の暑い一日、住職の寺運の盛衰を聞き、苔むす墓石をみながら感じたことであった。

称念寺をあとに愛宕街道に出、清凉寺の三国伝来の

釈迦如来像を拝む。釈迦像を将来した裔然の墓は、多くの観光案内書や昭和六十年六月発行の書物にも「寺の東、清滝道をへだてた民家の裏側に生垣をめぐらした一画内にある」と親切に教えているが、すでに清涼寺境内に移されており、嵯峨天皇・檀林皇后の宝篋印塔と層塔の横に建てられている。墓石は八角型の石幢で、全体に磨滅しているが幢身上部に刻んだ仏像がわずかにみえる。



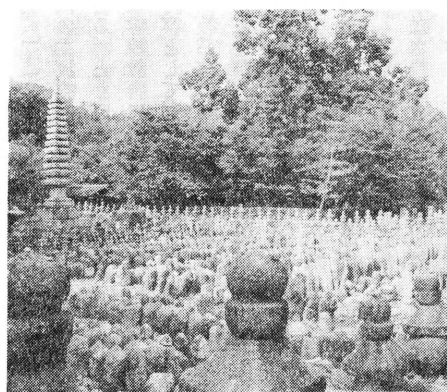
墓の裔然の開山

清涼寺の西門を出て化野念仏寺に向う。小倉山麓の小徑をたどれば土産物の店や茶店が増え、若い人の喚声なども聞えてはくるが、京の田舎らしいたたずまいの家のあいだに竹籬がみえ、小倉山の山裾には蟬しぐれが聞え、まだまだ幽寂の趣きをのこしている。二尊院、檀林皇后ゆかりの檀林寺、嵯峨の往生院の旧地にそのあとを伝えるという祇王寺そして竜口寺など『平

家物語』の舞台となった旧跡が点在し、その世界に思いをめぐらせば刻のたつのも忘れる。

この小倉山山麓の西北の地は化野（阿太志野）とよばれ、往古より里人の死骸を葬るところで、東の鳥辺野、北の蓮台野とともに葬送地の一つであった。兼好法師が『徒然草』に「あだし野の露消えるときなく」と語っている如く、すでに鎌倉時代より知られており、鎌倉末から室町時代にかけて化野一帯の墳墓の近くや路傍に、供養のために石仏や塔婆が、五輪塔、宝篋印塔、多宝塔が造立され、また時代が降るにしたがいおびただしい数の一石五輪が建てられたのである。造立年月も、供養の名も、施主の名も彫られていないこれらの石仏・石塔は、名もない多くの庶民の死者への愛着と追善供養の願いがこめられているのである。それらは幾星霜のうちに土に埋れ、傷つき、あるいは草木にかくれ野ざらしになってしまった。明治三十六・七年頃通幽上人によって化野の山野に放置されていたこれらの石仏・石塔を一ヶ所にまとめ供養されたのが今日の念仏寺「西院の河原」とよばれる石仏群である。境内にある石仏約八千体、正しく無縁仏の浄土とでもいえよう。

化野念仏寺の成立が、弘法大師のこの葬場の死者供養した如来寺にはじまるといい、また法然上人が念仏



化野念仏寺「西院の河原」

道場を開いてから念仏寺となったと伝えているが、しかし正徳二（一七一二）年寂道上人によって再建された頃が、念仏寺の成立とみられ、それは正しく化野無常所の三昧寺として再出発したとみるべきであろう。孟蘭盆会を間近にひかえた或る夕方、若い人びとが談笑しながら参道の石段を下っていくのとすれちがった。彼等はいま見てきたであろう石仏が身を寄せあっている「西院の河原」に、あるいは一体一体の石仏に何を感じたであろうか。ふり返り、後姿をみながら何か空しい思いがしてならなかった。

（なりた しゅんじ 文学部教授）

## 雛芥子

山田 勇

軽やかな単純な形のうすい花びらを、ひらひらと風にゆるがせている姿、細い長い茎の上ののりながら。その茎には、やわらかい毛を生やしているのも単純な茎だけに、視覚の上からもよいアクセントとして心地よい眺めである。花壇に群生している集団の美しさは何にも増して高貴であり、又庶民的な野性美の一瞬も感じられる。

（やまだ いさむ 文学部専任講師）

